

もくじ 浮世絵展 歌川派と歌舞伎 1P 鹿浜での子どもの生活⑧ 2P  
次回企画展・出展品紹介 版本の世界 3P

# 足立史談

第564号

2015年2月15日  
足立区教育委員会  
足立史談編集局  
足立区立郷土博物館内  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562  
(25-308)



三代歌川豊国  
「東海道五十三次の内 赤坂 六代目松本幸四郎の沢井又五郎」

## 浮世絵展 歌川派と歌舞伎

— 勇壮なる役者絵の世界 —

会期 二月十日(火)～四月六日(月)



初代歌川豊国 「嵐三八の奴鳥羽平」

博物館では現在、「歌川派と歌舞伎―勇壮なる役者絵の世界―」と題し、役者絵に焦点を当てた浮世絵展を開催しています。

江戸における歌舞伎は、寛永元年(一六二四)年に初代中村勘三郎が幕府の認可を得て興行を催したことに始まります。延宝年間(一六七三～八〇)には、勘三郎の中村座の他、市村座・森田座・山村座が幕府公認となり、多くの歌舞伎役者が活躍するようになりました。これに後押しされて、芝居小屋の絵看板などを手がけていた鳥居清信が、役者を描いた一枚摺を創始し、勝川春章が顔形の写実性を高めた似顔の表現を確立させて、役者絵の基礎を築きました。

その流れは、やがて初代豊国や国貞(二代豊国)、国芳といった歌川派の絵師に引き継がれ、江戸後期には歌川派を中心として数々の役者絵が生み出されていくこととなるのです。

今回の展示では、郷土博物館では初公開となる作品を多数交えて展示しています。その誕生から明治時代までの役者絵を中心に、団扇絵や玩具絵まで、様々な役者絵の形をお楽しみください。

### 関連イベント

【展覧会講座】  
「役者絵あの手この手」  
— 歌舞伎の発展と浮世絵の変化 —  
小林優 (当館専門員)  
二月二一日(土)  
午後二時～午後三時三〇分  
郷土博物館二階講堂

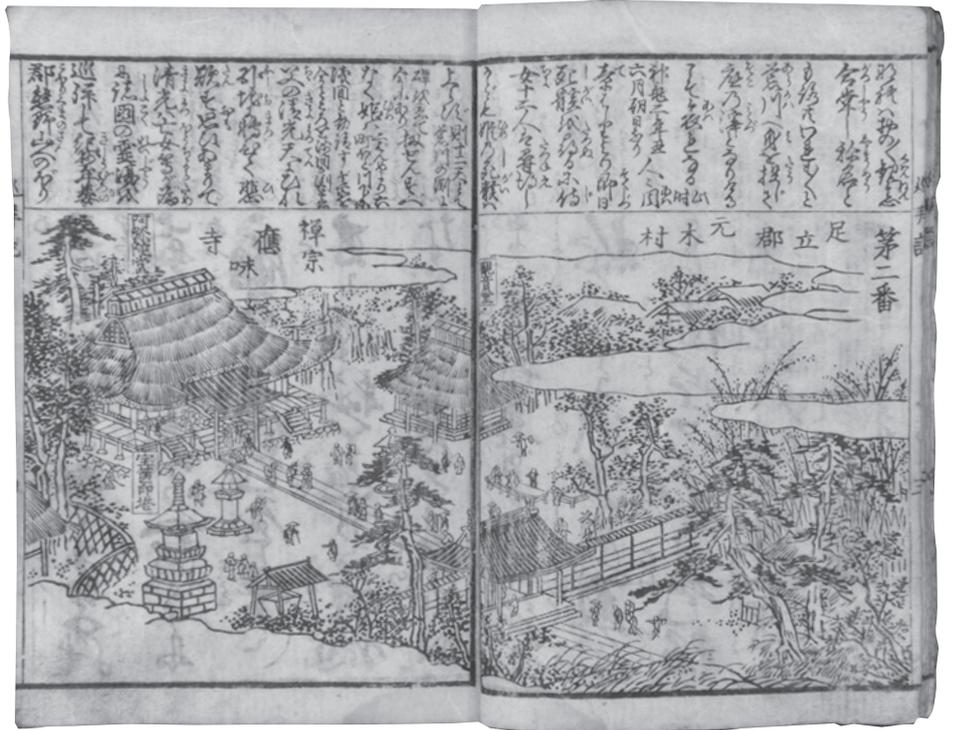
【ギャラリートーク】  
三月一四日(土)  
午後二時から一時間程度  
郷土博物館企画展示室





寺(調布市)と合併)、第六番常光寺(江東区亀戸)の六ヶ寺のことをいう。この六ヶ寺には、寺によって人名や筋書きが異なるが、長者同士が婚姻関係を結び、些細な事から嫁いだ娘が自殺してしまうという悲話

が伝わっている。  
『六阿弥陀詣』に記された伝説はこうである。聖武天皇の時代というから、今から一二五〇年程前のことになるが、宮城に庄司清光という人物がいた。ある日の夢で清光は神託を受け、紀伊国(和歌山県)から熊野神社を勧請し、王子に社を築いた。まもなく清光は美しい女子を儲け、足立姫と名付けた。足立姫は、近郷の沼田治部少輔に嫁ぐことになったが、これは足立姫の望むものではなく、そのため舅のそしりをうけることがしばしばであった。そこで足立姫は、清光のもとへ行く理由をつけて家を出、荒川(現在の隅田川)に着くと、侍女十二人と共に称名(南無阿弥陀仏)を唱えながら、荒川の浅間淵(宮城二丁目付近)と呼ばれる場所に身を投げた。娘の死を悲しんだ清光は諸国巡礼を行い、紀伊国の熊野権現で菩提を弔い、下山する時に霊木を得る。清光は、衆生済度の願をかけ、霊木を海中に投じ、もし納受されるならば国元に漂着することを願った。そして、国元に帰ってみると、霊木が熊野木(江北三丁



第二番 足立郡元木村応味寺(『六阿弥陀詣』画:喜多川月磨 当館蔵)

目の熊木橋付近)に漂着しており、喜んだ清光は、たまたま滞在していた行基に頼んで、六体の仏像を造立してもらい、ゆかりの場所に安置した。これが六阿弥陀の始まりである。この伝説は、寺や本によって伝わった内容に違いがあり、内容に矛盾も多く、江戸時代の頃から単なる逸話に過ぎないことが指摘されている。実際、江戸時代の指摘通り、この伝

説を事実とは見なしがたい。しかし、伝説が生まれた背景には何らかの歴史的事実があることが多く、現在では、そうした観点から伝説を読み直す試みも行われている。そして、この伝説は、江戸時代の庶民に、六阿弥陀を順々に詣でる風習を生み出した。足立姫が舅の嫁いびりによって死を選んだことから、女人成仏の寺として知られるようになった。その結果、六ヶ寺に関する案内板や関連書がたくさん作られるようになり、その一つが『六阿弥陀詣』なのである。さて、右に掲げた箇所は、上部に六阿弥陀の縁起、下部には挿絵が描かれているが、基本的には下部には六阿弥陀周辺の地誌が記されている。ここに掲げた挿絵には、元木村の応味寺、ならびにその境内に阿弥陀堂や宝篋印塔、そして参詣に來たたく

さんの人々等が描かれている。応味寺とは、甘露山応味院延命寺のこと、元は小台にあったが、明治時代に荒川放水路ができた関係で廃寺となり、現在は宮城山円明院恵明寺(足立区江北)に合併されている。地誌の箇所には、豊島方面から荒川を船で渡る様子や、行基が阿弥陀仏を作るときに余った木で彫ったという仏像が鎮座する木余如来性翁寺(足立区扇)についても記してある。性翁寺には、足立姫のものと伝わる墓も存在している。  
ところで、著者の十返舎一九といえ、弥次さん・喜多さんの珍道中でおなじみ、滑稽本の『東海道中膝栗毛』で有名なが、彼の六〇〇点以上に及ぶ作品の中には『六阿弥陀詣』のような地誌や、寺子屋の教科書的な往来物などもあった。一方、挿絵を描いた喜多川月磨は、喜多川歌麿の門人で、一九の作品の挿絵を多く描いた人物として知られている。

今回は、四月から開催予定の企画展で展示する予定の資料について、一足先に紹介した。展示では、足立に関係する資料を数多く出展し、版本の歴史と足立の教養・文化についてせまる予定である。多くの方々のご来館をお待ちしている。

(郷土博物館専門員)